

「とこしえの天の力のもとに」

——モンゴル時代発令文の冒頭定型句をめぐって——

小 野 浩

はじめに

13・14世紀モンゴル時代発令文の冒頭は、モンゴル語とその漢訳をともに示すなら、

- (1) mǒngke tengri-yin kücün -dür (とこしえの天の力のもとに)
長 生 天 氣力 裏
- (2) { yeke su jāli-yin 'ihe'en -dür (大いなる威福光の加護のもとに)
大 福廢 護助 裏
qa'an-u su -dur (カアンの威福のもとに)
皇帝 福廢 裏

そして発令者を示す

- (3) { qa'an jārlıq manu (カアン われらのおおせ)
皇帝 聖旨
~ (某) ~ üge manu (~ (某) ~ われらのことば)
~ (某) ~ 令旨
(懿旨、令旨の漢字音に由来する形 *iji*, *lingji* も見られる)⁽¹⁾

の三要素からなるものが多くを占め、これに続けて布告の対象となる者への呼びかけがなされる。

モンゴル期発令文はウイグル文字ないしパスパ文字表記のモンゴル語とその直訳体白話風漢文が中心で、それらは碑刻や文書その他の形で伝存しており⁽²⁾、上記の冒頭句も含めた命令文全体の表現はモンケ Möngke 時代より次第に定式化が進み、13世紀後半のクビライ Qubilai 時代以降はそれがほぼ固定化してゆく。

本稿ではこの冒頭句のモンゴル語文言—(1)・(2)時には(3)も—に由来すると考えられる表現のうち、モンゴル文・漢文のもの以外でその痕跡が窺えるものを広大なモンゴル帝国内からいくつか拾い上げてみたい。なお、当初この文言そ

のものについて、ささやかな検討を加えることを予定していたが、紙数の都合もありこれは別の機会に譲りたい。

I

まず、元朝と密接な関係にあったチベット関係の史料を見てみよう。山東省長清県靈巖寺の大元国師法旨碑（ヘビ年、1365年？）は大元国師のコンチョクギェルツェン Dkon mchog rgyal mtshan がこの寺の寺産保護を命じたもので、チベット文・直訳体白話風漢文合璧碑として知られる。

- (1) rgyal po 'i lung gis
王(皇帝)の命令(聖旨)によりて
- (2) dkon mchog rgyal mtshan ta'i dben gu'i zhhi'i (shhi'i) gтам
コンチョクギェルツェン 大元国師のことば(法旨)
[常風玄: 514; 京大展: 25, 41]

rgyal po'i lung gis は漢訳の「皇帝聖旨裏」にあたる。これに続き呼びかけられる対象者が列挙される。

チベットのシャルウ Zha lu 寺に関する13世紀末から14世紀前半の発令文書は 'Zha lu Documents' として G.Tucci が紹介したが、そのうちⅠからⅧの文書については冒頭句が、

- rgyal po'i lung gis / ~ ~ ti shri'i gdam
王(皇帝)の 命令(聖旨) によりて 某々 帝 師の ことば(法旨)
(IVでは ti shhi'i)

とあって、靈巖寺碑と同じ構成である[Tucci II : 747-752]。ただⅨ・Ⅹ文書はこれらとは少しく異なる文言で始まる。Ⅸ文書の冒頭は折り目に隠れた箇所があるのでⅩ文書でみると [Tucci II : 752-754]、

- (1) // gnam gyi she mong la /
天の力に
- (2) rgya po'i bsod nams la
王の幸福に
- (3) chos dpal cing swi'u tsing dbang gi gtam
チョーペル鎮西武靖王のことは

前二者の -gis (instr.) がここでは -la (dat.-loc.) となっているが、この三行はモンゴル発令文の常套句の一つ (1) möngke t(e)ngri-yin kücū(n)-dür

(2) qayan-u suu-dur (3) (某々) üge manu に構成、意味ともにほぼ対応すると見てよからう。mōngke「とこしえの」に当たる語と manu「われらの」に当たる語が見えないものの、モンゴル語の言い回しをチベット語で表したものに相違ない。

ここで発令者はモンゴルの諸王チョーパル(チョスパル、捌思班)であって、モンゴル語であればまさに üge であるべきもの。従って元のチベット僧たる国師や帝師が出した命令を法旨と呼ぶのは漢訳の便宜に過ぎず、gtam も特に僧侶に限られた命令ではなく単に üge の言い換えに過ぎない。要は対チベット関係のチベット文での発令は gtam と表されたということであろう。

次に挙げるのは D.Schuh の紹介・研究にかかる二例である。まず1254年発令文に含まれるクビライの命令部分の冒頭 [Schuh: 105, 109, 115] :

bla ma dkon mchog rnam kyī byin rlab dang //
至聖なる 最も貴き宝物(三宝) の 恩恵 また
gnam gyis bskos pa'i rgyal po jing gir gan gyis dang //
天によりて 指名された 王(カン、皇帝) ジンギスカン によりて また
ye ga rgyal po mong gor rgyal po'i bsod nams kyis /
大(くyeke) 王 モンゴル 王 の 幸福 によりて
sangs rgyas bstan la phan phyir go pe la 'i gtam /
ブッダの 教え に 益するため ゴベラの ことは
(クビライ)

「天によりて指名された王チンギス・カン」という表現は、のちに触れるラテン語の書簡類が天命を受けた神の子チンギスを説くのに符合する。ここでは仏宝の恩恵—チンギス・カン—モンゴルのカンたち—クビライ—という四段構えの序列が窺われる。

次いで1264年のクビライの命令の冒頭 [Schuh: 118, 120, 122] :

tshe ring gnam gyi she mong las /
長生なる 天 の 力 から(によりて)
bsod nams chen po 'i dpal la brten nas
幸福 ← 大いなる の 光輝 の助けに依りて
rgyal po nged kyī lung
王(カン、皇帝) われ(ら) の 命令

ここでは、mōngke「とこしえの」も manu「われらの」も揃ったわけで、もはや全体がそのままモンゴル語聖旨 jarliy の冒頭三行の「敷き写し」calque であ

る。今、第二行目に注目すれば、「敷き写し」において、

yeke suu (大福廬)——bsod nams chen po

～yin ihegen-dür (～護助裏)——～la brten nas

の対応は明白であるから、残る jali の語——漢訳において明瞭には現われぬ——を置き換えるにチベット語 dpal 「光、輝き」を以てしたことになる。するとこのチベット語の calque から逆に、これまで徹底していなかった jali の語義についても、これに言及した大方の研究者がときにトルコ語 yalmaq 'to blaze, shine' や yalın 'flame' と関連させつつ論じた通りに、「光」や「輝き」の意味で把えてよい確証——少なくとも「敷き写す」際にはそう意識されていた——が得られたと言えよう。さらに suu jali の二語の関係についても、チベット語では「大いなる福の(～i)光輝」として両者を「の」で結んでいることから、並列的に「suu と jali」と把えるよりむしろ「suu の jali」の方向で解する方がよさそうである。⁽³⁾要するにこれこそ möngke tengri-yin kücün-dür / yeke suu jali-yin ihegen-dür / qayan jarliq manu という聖旨 jarliq に典型的な冒頭の決まり文句をそのままチベット語に写し換えたものと言ってよく、その意味でまことに貴重な例である。

チベット文のほかに、ペルシア語やトルコ語のもので該当する文言の痕跡は見当たらないだろうか。次にこれを探ってゆこう。

II

14世紀初頭イル・カン国治下にペルシア語で書かれた世界史 Ġāmi' al-Tawārīx のモンゴル史ガザン紀には勅令 (yarliq) の写し (sawād) が何通か収められている。その冒頭はいずれもほぼ同じなので、ここでは1例引くにとどめたい。

モンゴル軍人へのイクター授与に関する勅令の写し

慈悲深く慈愛遍きアッラーの御名において

至高なるアッラーの力によりて (のもとに)

またムハンマドの信仰 (信徒) の幸運によりて (のもとに)

スルタン・マフムード・ガザンの命令

sawād-i yarliq dar bāb-i iqtā' dādan ba-lašgar-i Muḡul

bism' llāh' r-raḥmān' r-raḥīm'

bi-quwwat' llāh' ta'ālā

wa mayāminⁱ millatⁱ Muḥammadi

farmān-i Sulṭān Maḥmūd Ġāzān

[Rašīd: 303]⁽⁴⁾

これに続いて呼びかけ対象者が挙げられる。バスマラの部分はひとまず措き、
至高なるアッラー(神)の「力」のもとに/
またムハンマドの信仰(共同体)の幸福(幸運)のもとに/
スルターン・マフムード・ガザンの命令/

の文言三行は、一方でこれをイスラム的な考え方の表出と解して何ら不自然でないとも言えよう。さらに後文には

wa'llāh^a yuwaḥḥiq^a-nā bi-luṭfⁱ-hi wa yu'ayyid^a-nā bi-naṣrⁱ-hi

アッラーはその愛顧もてわれらを成功させ、その佑助もてわれらを支え給う

というアラビヤ文が存在するため、こうした考えの表現はイスラムのものと思なすべきとの意見もあろう。

勅令を全訳された本田氏は、別の論考でこの勅令に言及し、

ガザンのイクター授与の勅令(ペルシア文)をみると、これがアッラーフへの祈願に始まり、『コーラン』の一句をもって閉じているのは、ガザンのイスラム帰依からして当然のことであり、条文中にもイスラム法の規定が散見する。他方、勅令の本文中にはモンゴルの固有制度に関連のあるモンゴル・トルコ語の術語を相当数含んでいる。 [本田:217]

と述べておられる。まさにその通りであって、冒頭句に限ってみても「これがアッラーフへの祈願に始ま」るのは「ガザンのイスラム帰依からして当然のこと」である。

さてここで敢えて注目したいのは、

- (1) 神「アッラー」とその「力のもとに」(bi-quwwat)
- (2) 預言者「ムハンマド」とその「幸運・福・恩恵(のもとに)」(mayāmin)
- (3) 発令者「ガザン」の名とその「命令」(farmān)

という三段構えの表現パターンであって、直訳とは云えぬにせよ、ここにイスラムの衣を纏ったモンゴル式定型句の跡を読みとりたい。加えてこの同じ勅令中には、

至高にして至聖なる神の力によりて われらの太祖チンギス・ハンは生まれついてより神の佑助と主の靈感 (ta'yīd-i ilāhī wa ilhām-i rabbānī) に特別に恵まれていた。 [Rašīd: 303]

という、モンゴルの表現ないし考え方を示す文もあるだけに、やはりモンゴ

ル的表現がその土台となっている可能性は完全に捨て切れないのではないか。あるいは二者択一でどちらか一つと決するのではなく、イスラムの名辞とモンゴルの表現の融合と見なしでもよいのではないだろうか。

イスラムの影響が定型句に現われた例としては、同じくイル・カン国時代のものと推定される文書に、上記と多少共通する文言が見られる。Pelliot が *Āthār-e Īrān*, 1936で紹介し、Cleaves が検討を加えたテヘラン博物館蔵のウイグル文字モンゴル語文書の一つ (Cleaves の云う Document I) では、

- (1) Mongke tngri-yin kūčündür
- (2) Muqamad baiyambar-un imadtur
- (3) yeke suu jāli-yin ibegendür [Cleaves 1953: 26]

- (1) とこしえの天の力のもとに
- (2) ムカマド預言者の支援のもとに
- (3) 大いなる威福光の加護のもとに

とあり、イスラム信仰を端的に示す語を用いた一文、「預言者ムハンマド (Muḥammad Payğambar) の支援・支え (‘imād)」が「とこしえの天の力」と「大いなる威福光の加護」の間に割り込んだ形となっている。本来なら発令者の名がこのあとに続いたものと推定されるが、断簡であるため不明である。ここではアッラーないし神 (xudāy) の語は消えてしまうが、それは(1)行目に含ませているためか、あるいは神は(1)行目の tengri だけで十分なためか、いずれにせよ発令者が誰かをも含めて、問題を孕む。⁽⁵⁾

次にトルコ語で記されたものを挙げよう。⁽⁶⁾

831年 Ğumādā I 月27日 (1428/ 3 /14) 付けの金帳カン、ウルグ・ムハンマド Ulug Muḥammad II 世がオスマン朝のムラト Murād II 世に宛てた書簡の冒頭をトランスクリプションで示すと、

Ḥaqq ta‘ālā ‘ināyatıla Muḥammad payğambar mu‘ğizātıla
Muḥammad-dın gāzī Murād-qa [Kurat: 8-9,161]

至高なる神の恩恵によりて ムハンマド預言者の奇跡によりて
(ウルグ) ムハンマドからガーズイー・ムラトへ

870年 Ša‘bān 月20日 (1466/ 4 / 7) 付け、金帳カン、ムハンマド・ハン Muḥammad Xān のオスマン朝征服王メフメト Muḥammad II 世宛て書簡の冒頭 (本文はトルコ語だが冒頭はアラビア語) :

- (1) huwa (写真版には見えない)

- (2) bi'l-quwwatⁱ 'l-aḥadīyatⁱ wa bi'l-mu'ğizātⁱ 'l-Muḥammadīyatⁱ
- (3) wa'l-burhānīyatⁱ 'l-madadīyatⁱ
- (4) fi'l-Maḥmūd- xallada'llāh^u mulk^a-hu
- (5) -īyatⁱ [Kurat: 38-39, 167]

- (1) かのお方
- (2) 唯一神の力によりて、ムハンマドの奇跡によりて
- (3) そして佑助の証拠（によりて）
- (4)(5) (←)マフムードに対する—アッラーが彼の統治を永遠ならしめますように—

このようにこれまた直訳では決してないが、15世紀のモンゴルの末裔が残した文書にも件の定型句が、意識はされなかったにせよかすかな痕跡として残っている。

これら二例に比べると、同じく15世紀のクリム・カン、ハージー・ギレイ Ḥāġġi Girāy の命令(söz)の冒頭は、この文言がねばり強く生きつづけたことを物語ってくれる（857年 Şafar 月26日—1453/ 3 / 8）。

- (1) bi'smⁱ 'llāhⁱ r-raḥmānⁱ r-raḥīmⁱ
- (2) bi'l-quwwatⁱ 'l-aḥadīyatⁱ wa'l-mu'ğizātⁱ 'l-Muḥammadīyatⁱ
- (3) m(ä)ngü t(ä)ngri küčündä Muḥammad rasül Allāh walāyatınd(a)
- (4) Ḥāġġi Girāy sözim [Kurat: 64-65, 173-174]

- (1) 慈悲深く慈愛遍きアッラーの御名において
- (2) 唯一神の力のもとに ムハンマドの奇跡のもとに
- (3) とこしえの天の力のもとに アッラーの使徒ムハンマドの庇護のもとに
- (4) ハージー・ギレイ わがことば
- (3) 行目には「とこしえの天の力のもとに」がそのままの形でトルコ語で表わされる。walāya（「庇護」）の語が見えるがこれはイスラムにおいても重要な概念である。

最後にオスマン朝のメフメトⅡ世による、アク・コユンルのウズン・ハサン Uzun Ḥasan との戦いの戦捷宣言を内容とする文書がウイグル文字トルコ語で残されている（ウイグル文字の下には逐一アラビア文字で「読み」が附されている）。これも類例の一つに加えてよいかもしれない。

- | | | |
|-----|---------------------------|-------------------------|
| (1) | huwa 'l-ganiy" | 富裕なるかのお方 |
| (2) | Allāh ta'ālā 'ināyatı-dın | 至高なるアッラーの恩恵によりて |
| (3) | Sultān Muḥammad Xān sözüm | スルターン・ムハンマド・ハン
わがことば |

[Arat: 40, pl. I]

ちなみに166行目に Allāh が、172行目、186—187行目、196行目には tengri が抬頭されているが（172行目の「天」は173行目の印のあるところ、186—187行目にある「天」は187行目の印のあるところに入る）、興味深いのは tengri の方が Allāh より高く（右寄りに）抬頭される点である。明らかに tengri を Allāh より上位に置いていたことを示すものである [Arat: pl. XVII-XIX]。

III

モンゴル帝国と西欧キリスト教世界との関係に関しては既に Pelliot が “Les Mongols et la papauté” [Pelliot (1923—1931)] において西欧側、モンゴル側の史料に基づく詳細を極めた研究がなされており、その方面の研究は彼により尽くされた観さえある。我が国では佐口透氏の『モンゴル帝国と西洋—東西文明の交流4』（平凡社 1970）が両者の間に交わされた書簡類の紹介も含み、この分野に踏み込んだ数少ない書物であり、多大の便宜を与えている。また海老澤哲雄氏の一連の専論は、この方面における貴重な貢献である。

まずモンゴル帝国に足を踏み入れて貴重な記録を遺した三人の旅行記から「天の力」と関連する箇所を引用しよう。

1246年にグユク Güyüg の宮廷に滞在したプラノ・カルピニのジョヴァンニ修道士 Giovanni di Pian di Carpine の旅行記に次のようにある。

タルタル人の意図は、もし可能なら全世界をみずから服属させることであり、このことについては前に述べられた如く彼らはチンギス・カンから命令を享けているのです。それゆえ彼らの皇帝はその書簡にこう記すのです：《神の力、万民の皇帝》と。またその印璽の銘にはこうあります：《天上に神、地上にクユク・カン、神の力、万民の皇帝の印璽》と。

Intentio Tartarorum est sibi subicere totum mundum si possunt, et de hoc a Chingiscan habent mandatum, sicut superius dictum est. Iccirco eorum imperator sic in litteris suis scribit: 《Dei fortitudo, omnium hominum imperator》, et in superscriptione sigilli sui est hoc: 《Deus in celo et

Cuyuccan super terram, Dei fortitudo, omnium hominum imperatoris
sigillum》

[Carpine 1989 : 293]

「神の力」は *tngrī-yin kücū(n)* を、「万民の皇帝」は (*dalay-in*) *qan / qaγan* を想起させるが、この *dalay-in qan* が他ならぬグユクの印璽銘—1246年ローマ教皇インノケンティウスⅣ世宛ての国書に朱く捺されたもの—に見られることは興味深い。

möngke tngri-yin / kücün dūr yeke mongγol / ulus-un dalay-in /
とこしえの 天の 力のもとに 大いなるモンゴル ウルス(のまた)海内の
qanu jrlγ il bulγa / irgendür kürbesü / büsiretügey ayutuyay
カンのジャルリグ服せる背ける民のもとに至りなば 重んずるよう畏れるよう

[Pelliot : pl. II]

ちなみに *il bulγa irgen* と端的に表わされてはいるが、この「服せる民 叛ける民」という考え方はモンゴル帝国の世界支配観を考えると重要なものである。既に Pelliot が紹介している如く [Pelliot : 126]、類似の表現は Simon de Saint-Quentin のモンゴルに関する報告書に載せられたグユクのバイジュ・ノヤン (Baiothnoy) 宛ての書簡 (1247) にも見てとれる。

長生の神の命令によりて、慈しみ深く尊敬すべき神の子チンギスカムは言う。神はあらゆるものに超越されるがゆえ、神の御身は不滅である。また地上にはチンギスカムのみが支配者である。われらはそのことがあらゆる人の聞き知るところとなるべくあらゆる地へと、われらに服従せる地方であれまたわれらに背叛せる地方であれ、到達せんことを欲する。

Per preceptum Dei vivi, Cingischam filius Dei dulcis et venerabilis dicit quia Deus excelsus super omnia, ipse (est) Deus immortalis et super terram Cingischam solus dominus. Volumus istud ad audientiam omnium in omnem locum pervenire provinciis nobis obedientibus et provinciis nobis rebellantibus.

[Simon : 115-116]⁽⁷⁾

またルブルクのギョーム Guillaume de Rubruc が伝えるモンケからルイⅨ世への書簡中に、

そして汝ら聞き信じたるときに汝らがわれらに服そうと欲するなら、汝らの使節ら (*nuncii*) をわれらに送るがよい。さすれば汝らがわれらと和平あるいは戦争 (*pax vel bellum*) いずれの関係を持ちたいのかが確証さ

れるであろう。

si vultis nobis obedire, mittatis nuncios vestros ad nos; et sic certificabimur utrum volueritis habere nobiscum pacem vel bellum.

[Rubruc: 309]

il には obediens および pax が、bulya には rebellans および bellum が対応すると考えられる。この il と bulya の対置・対立は、この世を dār al-islām と dār al-ḥarb に二分するイスラム世界における世界観と似通うものがある。

この1254年のモンケのルイⅨ世宛ての書簡はルブルク旅行記中にラテン語訳の形で載せられているが、この部分の邦訳としては護雅夫氏のもの〔カルピニ／ルブルク 1989:287-289〕に加え、海老澤哲雄氏の訳もある〔海老澤 1979:732-733〕。この書簡前半の両氏の訳を、やや長きに亙るがここに引用する。

こは、永遠なる神の命なり。天上には唯一の永遠なる神いまし、地上には唯一の君主チンギス＝カン、神のみ子、テムジン＝ツィンゲイすなわち「鉄の音」あり。(かれらは、チンギスが鍛鉄工だったので、かれを「鉄の音」と呼んでいます。そして大変思い上がって、かれをいまは「神のみ子」と称しているのです)。

こは、汝に伝えられたる神託なり。モンゴル、ナイマン、メルキト、はたまたイスラム教徒ども、如何なるものなりとも、耳の聞きうる限りの土地、馬の至りうる限りの土地に住めるもの、悉く聞きて存知せよ。余が命を聞き存知するも信ぜず、余らに戦いを挑まんか、爾後、眼あれども見ず、掴まんとすれど手なく、歩まんとすれど足なきに至らんことを、汝、聞き知らん。こは、永遠なる神の命なり。モンゴル人の広大なる領土に偏ねき永遠なる神のみ力もて、マング＝カンの命を、フランク人の君主ルイ王、爾余のあまねき諸王、司祭どもが輩、かつはフランク人全天下に広く知らしめ、わが言を存知せしめよ。永遠なる神の命は曾て、チンギス＝カンの手もて発せられたるも、この命は、チンギス＝カンよりも、爾後の諸カンよりも、汝がもとには達せざりき。

[カルピニ／ルブルク:287-288]

上に見える「…永遠なる神のみ力もて」について、これがモンゴルの発令文冒頭の mōngke t(e)ngri-yin kūčü(n)-dūr に相当することから、ここより新たな一篇の文書が始まる、とする Voegelin の新見解を紹介しつつ、海老澤氏は、それを踏まえて次のように (A) (B) に分けて訳されている。

(A) これは、とこしえの神の命である。天上には、唯一のとこしえの神

のみ存し、地上には、唯一の君主チンギス＝ハン、神の子、Demugin Cingei、即ち鉄の音のみ存する。(かれら自身チンギスを鉄の音と呼んでいるが、それは、かれが鍛冶屋だったからである。思い上がって今日ではかれを神の子とっている。)

これは汝らに伝えることばである。モンゴルであれ、ナイマンであれ、メルキットであれ、ムスリムであれ、何人でも、聞き得るところであればいずこでも、馬の達し得るところであればいずこへでも、聞かしめ知らしめるようにしよう。我が命を聞き知りながら、信ぜんとせず、我らに軍隊を差し向けようとしたならば、以後、目があっても物が見えず、何かを持つとしても手がなく、歩こうとしても足がなくなる由、汝らは聞き知るであろう。これは、とこしえの神の命である。

(B) モンゴル人の大いなる世界を覆うとこしえの神の力により、ムンゲ＝ハンの命を、フランクの君主ルイ王に、他のあらゆる君主たちに、司祭たちに、フランクの庶人に宛て、わがことばを了解せしめよう。とこしえの神の命は、チンギス＝ハンにより作成されたが、チンギス＝ハンからも、他の後継者からも、この命は汝らのもとには達していない。

Voegelin、海老澤両氏は、この書簡が実際に二通の文書から成っていたものと見なす。原文書が二通存在したかどうかまでは速断できないまでも、内容からみて少なくとも(B)で一旦区切って解釈することは受け容れるべきである。また海老澤氏の言うように「とこしえの神の命により」に続いて、フランク人の君主ルイ王、諸王、司祭たち…と宛先が列挙されるのが、モンゴルの発令文と共通する構成であることから、ここで大きく二つに分かれることは確実である。すなわち、海老澤訳の(A)がチンギスの命であり、(B)以下がモンケの命ということになる。さて、両者の訳で括弧にくくられたところはルブルク自身による但し書ないし説明文であって、確かにWyngaertの校訂したラテン語テキストにおいても、この部分を《 》から外すことによってそのことが示されている。しかしこの箇所鋭い考察を加えたPelliotの見解〔Pelliot : 125〕を海老澤氏は採られなかったようである。Wyngaertのテキストを段落番号・括弧等も含め、そのまま引用すれば次の如くである。

6. 《Pereceptum eterni Dei est. In celo non est nisi unus Deus eternus, super terram non sit nisi unus dominus Chingischan, filii Dei, Demugin Cingei, id est sonitus ferri》. Ipsi vocant Chingis sonitum ferri, quia faber fuit; et in superbiam elati, dicunt eum modo filium Dei.

7. ≪Hoc est verbum quod vobis dictum est : Quicumque sumus Moal, quicumque Naiman, quicumque Merkit, quicumque Musteleman et ubicumque possunt aures audire, quocumque potest equus ambulare, ibi faciatis audiri vel intelligi; ex quo audierint preceptum meum et intellexerint, et noluerint credere et voluerint facere exercitum contra nos, audietis et videbitis quod erunt habentes oculos, non videntes; et cum voluerint aliquid tenere, erunt sine manibus; et cum voluerint ambulare, erunt sine pedibus. Hoc est preceptum eterni Dei. Per virtutem eterni Dei per magnum mundum Moallorum, preceptum Manguchan sit domino Francorum Regi Lodovico et omnibus aliis dominis et sacerdotibus et magno seculo Francorum, ut intelligant verba nostra. Et preceptum Dei eterni factum a Chingischan, nec a Chingischan nec ab aliis post ipsum pervenit hoc preceptum ad vos ≫. [Rubruc: 307-308]

3行目 Ipsi vocant …以下、その段落末の filium Dei. まで（つまり≪ ≫の付されていない部分）がルブルクの説明文とされているが、Pelliot は、これは誤りでルブルクの説明は Demugin Cingei から始まるものとする。そして Demugin 直前の filii Dei 「神の子の」は段落7. の Hoc est verbum 「これはことばなり」へと、説明文を間にはさんで繋がるべきものであるという。そしてここにいる filii Dei とは具体的にはモンケを指しており、結局「これは神の子（すなわちモンケ）のことばなり」となると結論した。ここで Pelliot は当然モンゴル命令文冒頭の定型句の一つ「カガン われらのおおせ (qayan jarliy manu)」ないし「～（某）～われらのことば（～ üge manu）」を想定していたであろう。校訂テキストにとらわれぬ実に鮮やかな指摘である。文法的にみても filii Dei が直前の unus dominus Chingischan を言い換えた同格であるなら filius Dei と主格で表わされねばならず、また Demugin Cingei, id est sonitus ferri⁽⁸⁾ も説明文とみた方がより自然である。しかし Pelliot の言うとおりここでの「神の子」を果たしてモンケと解してよいのであろうか⁽⁹⁾。この点だけはやや無理があると思われる。というのも、モンケの主張内容はやはり海老澤氏訳の (B) から始まるものであり、(A) はチンギスの命と考えるべきであって、そう考えれば (B) の「マングカンの命令」perceptum Manguchan に対応するのが (A) の「これは神の子（チンギス）のことばなり」filli Dei … Hoc est verbum であり、また (B) での宛先（フランク王、諸王、司祭…）に対応するのが (A) での「モンゴル、ナイマン、メルキト…」と考えられるか

らである。さらに言えば、チングスの命令の末尾とされている「これはとこしえの神の命令である」Hoc est preceptum eterni Dei. をチングスの命令の冒頭の「とこしえの神の命令である」Perceptum eterni Dei ist. にそのまま対応するモンケの命令の出だしとして考えてもよいのではないか。

そこで以上の諸点を案配して、その構成をわかり易く示したテキストを次の如く提案してみる。

(A)

Preceptum eterni Dei est.

In celo non est nisi unus Deus eternus, super terram non sit nisi unus dominus Chingischan. (Demugin Cingei id est sonitus ferri. Ipsi vocant Chingis sonitum ferri, quia faber fuit; et in superbiam elati, dicunt eum modo filium Dei.) Hoc est verbum filli Dei quod vobis dictum est: et cum voluerint ambulare, erunt sine pedibus.

(B)

Hoc est preceptum eterni Dei.

Per virtutem eterni Dei, per magnum mundum Moallorum, preceptum Manguchan sit domino Francorum Regi Lodovico et omnibus aliis dominis et sacerdotibus et magno seculo Francorum, ut intelligant verba nostra. Et preceptum Dei eterni factum a Chingischan, nec a Chingischan nec ab aliis post ipsum pervenit hoc preceptum ad vos.

さて三人の最後、マルコ = ポーロ Marco Polo の関連部分をいわゆる Benedetto 本 (テキストは特異な中世フランス語) から引くと、

そして [諸臣に与えられる] これら銘板 (tables) のすべてに命令が書かれており、それはこうである。「偉大なる神の力によりて、また神がわれらの皇帝に与えたもうた大いなる恩恵によりて、カンの名が祝福されるよう、そして彼に服さぬ者どもはすべて死すべし、亡ぶべし」

Et en toutes ceste tables est escrit un comandement, et dient: « Por la force dou grant dieu et do la grant grace que a doné a nostre enperer, le nom dou can soit boneoit. Et tuit celz que ne lo obieront soient mort et destruit ».

[Marco Polo : 71]

ここで tables がどのようなものかが問題だが、table の原義からして、材質はさて置き、とにかく平たい板状のものが予想される。そしてマルコ・ポーロ

の伝えるこの銘文は、パスパ字モンゴル語が両面に記された長方形のいわゆる
ミヌシンスク牌子とニュキ牌子、また同じく円形の上部に把手のつたいわゆる
ボゴトル牌子の銘と酷似する。ミヌシンスク牌子を例にとって Poppe のト
ランスクリプションとともに示せば [Poppe : 57-58, pls. VII, VIII, IX]、

- | | |
|---|--|
| <p>A. 1. dēngriyin k'uc'undur
2. mongk'a
3. qa'an nere qut'uqt'ayi</p> | <p>B. 1. bolt'uqayi k'en ülu bu-
2. širegu aldaqu ük'ugu</p> |
| <p>A. 1. 天のちからのもとに
2. とこしえの
3. カアンの名が祝福あるものと</p> | <p>B. 1. なりますよう 重んぜぬ者は誰も
2. 過失に落ち、死ぬであらう</p> |

「大いなる恩寵」云々の部分が対応を欠くが、キプチャク・カン国のアブドッ
ラー (14世紀半ば) の牌子⁽¹⁰⁾には [Ligeti : 287]、

- a). 1. mōngke tngri-yin kũc'ündür
 とこしえの天の力のもとに
2. yeke suu jāli-yin igegendür
 大いなる威福光の加護のもとに
- b). 1. Abdull-a-yin jrlγ ken ülü
 アブドッラーの聖旨 誰も
2. būsirekü kümün aldaqu ükükü
 重んぜぬ者は過失に落ち死ぬであらう

とあって、この a) の 2 行目とは内容的にも近いものがある。文面が酷似して
いることからマルコ = ポーロのいう table — 上ではとりあえず「銘板」とした
— とはこれらの牌子そのものか、それに類するものである可能性は大いにあり、
愛宕松男氏の訳 (『東方見聞録 1』平凡社 pp. 191-192) のように「牌符」と
してよいようである。

これら三人の有名な旅行者の他にもモンゴル帝国と西欧との間にやりとりさ
れた書簡類は、殊に西欧の図書館、古文書館などにまだ多く蔵されていると思
われ、今後の新発見が期待されるが、13世紀のローマ教皇とイスラム諸国およ
びモンゴル帝国との間の往復書簡類の主要なものは Lupprian が一書にまとめ
ているので、ここではそこから二、三例を引くことにしよう。

1268年イル・カン、アバカ Abaqa の教皇クレメンスⅣ世宛ての書簡の冒頭に、

長生なる神の力によりて、またカアン¹の権能によりて、アバガのことは
この上なく神聖なるローマ教会の最高司教 (= 教皇) に

Per virtutem dei vivi et potentiam Chaan, verbum Abagha.

Sacrosancte ecclesie Romane summo pontifici. [Lupprian : 224]

これは manu を補ってモンゴル語を想定するなら mōngke tengri-yin kücün-dür, qa'an-u su-dur, Abaqa üge manu とでもなろうか。manu を補う他に、su と potentia の対応を認めてよいかどうか問題であるが、仮に両者を対応させてみるなら、potentia は統治上の権力というよりも何かに影響を与えるだけの威力、能力が原義であり [P. G. W. Glare, Oxford Latin Dictionary : 1416]、一方「福廕」と漢訳される su(u) について (ただし su jali も漢訳では同じく「福廕」、そこに「ちから」の要素を加味して考えてみるのも全く無意味なことではあるまい。

さてラテン語文献からだけでは断定できないがカアン Chaan とアバカは同一ではない。ここでの Chaan は、あるいはチンギスとも考えられようが、おそらくそうではなくていわゆるモンゴルの大カン、この時点ではより端的に言うならクビライのことである⁽¹¹⁾。

ややわき道に外れるがラテン語書簡類の場合、固有名詞を除いて一般には原語をローマ字で音写するケースはさほど多くないが、この書簡の末尾の年月日付けの部分はラテン語ではなく原語を音写したものが記されている点で極めて興味深い例である。しかもそれはトルコ語である。

Datum koga birgunda lov iel, id est anno draconis. Alting ai, id est mense sexto, vicesimo tertio die mensis. [Lupprian : 225]

koga birgunda lov iel の lov iel に対し「それはタツの年に、ということである」、Alting ai に対し「それは第 6 月に、ということである」と正しくラテン語に言い換えられている。birgunda, lov iel, Alting ai は、細かな表記表音問題を措けばそれぞれ、トルコ語の bir gūnda 「一日 (または、ある日) に」、lou / luu [<龍> yıl 「タツ年」、altı ay 「第 6 月」を表記したものであろうが、koga birgunda の koga は不明である。ウイグル文書では月初めの 10 日間なら yangı 「新しい」を用いて、例えば iki yangıqa 「2 日に」のように表わされるが、今、現代トルコ語の koca 「年老いた、老いた; 大きい」をこの yangı に対比させて、月の中旬ないし下旬、あるいは「なにか特別な日に」とか「吉日

に」と見なしてよいものか、koga が不明である以上、何とも言えない [Lupprian : 225]。id est anno draconis と id est mense sexto がトルコ語表現の直後に置かれているのと異なり、koca birgunda と離れて位置している点は気になるが、とにかく日付をあらわすラテン語は vicesimo tertio die mensis 「月の第23日に」となっている。

1274年のアバカの手紙にも、

汝らがタルタルと呼ぶモガル族の最も強大なアバガ王の前任者たちは、長生の神の力と自らの能力によりて、東方の地をことごとく自らの支配下に制圧し去り、また北方および南方の国々をジャイフーン大河 (magnus fluvius Gyon) に至るまで、まずは自らに貢納する国の地位に落としてみた、ということが知られるべし。

Notum sit quod predecessores potentissimi regis Abaga gentis Mogalorum, quos vocatis Tartaros, per virtutem dei vivi et potenciam suam cunctas terras orientales dominio suo subiugaverunt, et omnia regna septemtrionalia et meridionalia sub tributo suo in exordio redegerunt usque ad magnum fluvium Gyon. [Lupprian : 228]

per ... potenciam suam の suam (suus) はもちろん predecessores 「先達、前任者 (複)」を受けた上での「その、自らの」であり、potencia 「能力、権能」が単数であるから、歴代のモンゴル君主各々の potencia によって、という意味合いになる。平常の文章としてそのまま意味をとることもできるのであるが、やはりこの部分には定型句の (1)、そして (2) もその姿を垣間見せているものと解したい。

次は同じくイル・カンのアルゲン Arγun の1285年付書簡。これは佐口氏がすでに『モンゴル帝国と西洋』の中で紹介し、邦訳がなされており [佐口 1970 : 181-183]、海老澤哲雄氏も Chabot のテキスト原文を掲げて訳を示した上で検討を加えている [海老澤 1982 : 892-893, 899-900]。ただ Lupprian のテキストには大カン magnus cam たるコブラ・カム (クビライ・カン) の名がなく、冒頭に続く呼びかけの文も少しく変わっている他、異同がまま見受けられる。その冒頭は、

(長生なる神の力によりて) 大カムの恩寵によりて、アルゴヌムのことば
(potencia dei vivi et) gratia magni cam et verbum de Argonum.⁽¹²⁾

() 内は Lupprian が補ったもので残念ながら原文にはないようである。前置詞 per がみられないが、gratia は grātiā では決してなく grātiā (ablative) で

ある。ここで su(u)「福蔭」に意味が近いと思われる gratia「恩寵」の語が出てきたことで、qayan-u suu-dur (qa'an-u su-dur) の表現に一段と近付いた感がある。() 内がもし存在すればまさに möngke t(e) ngri-yin küčündür / qayan-u suu-dur / Aryun üge manu とうまく対応することになる。また第3句の「ことば」(verbum=üge) を発するイル・カン、アルグンの上位にある者としての第2句同士 magnus cam と qayan を対応させるなら、magnus cam = qayan / qa'an (≠qan) を想定することができるかも知れない。というのも「この書簡はモンゴル帝国の始祖チンギス・ハン、および宗主であって同盟関係にある元朝の大ハン・フビライの威光と恩寵を強調し」ており [佐口 1970: 183]、同書簡中には、

magnus cam nostrum bunum patrem Alaum (Hülegü) et
大 カム われらの 良き 父 アラウム (フレグ) そして
bonus Abaga filius eius, ……

その良き子アバガが…… (フレグに関する語がすべて accusative になっているのは Alaum の語尾の形に引きずられてのことであろう。大カムおよびアバガと同じく nominative であるべきところ。)

また、

et nos Argoni preceptum de cam, sicut erat, …
そしてわれらアルゴニに(大)カムから命ぜられたことは次の如しであった
…

のように、大カン—イル・カンの序列を示す表現が見てとれるからである。

以上の他に、Pelliot が紹介しているエルジギデイ Eljigidey の書簡にも類似の表現がみられ、これは上に示したアルグンの1285年書簡の冒頭と通じるものがある⁽¹³⁾。

*

以上、「とこしえの天の力のもとに」を手懸りに、その類似表現をモンゴル帝国内に探し求めて来たが、その行程・方針ともに一貫せぬまま、ときにわき道に外れつつあてのない「漫步」となった観がある。加えて常套句のみに注目したにとどまり、ここに例示した材料の内容にまでは踏み込むことができなかった。しかしこれまで示した諸例だけを見ても、それらが様々な文字、言語で記されているにせよ、それぞれの地域に固有のものとしてそうした表現が以前から存在したことを示す確証が一方で見出されぬ限りは、それらがおそらくモン

ゴル語命令文冒頭に代表される文言に由来するものであり、それが帝国の各地に広まって様々な文字と言語にその痕跡を残した、と考える方がむしろ自然であろう。とするなら、この定型句ひとつをとってみても、ここに大モンゴル帝国の持つ世界性のほんの一部を垣間見ることは許されるのではなからうか。この定型句そのものの考察は別に機会を持ちたいと考えている。

注

- (1) モンゴル命令文の名称 jarlig や üge については杉山氏が的確な規定を下しており [杉山 1990 a : 1-2 ; 杉山 1990 b : 98]、今これを図示すれば次のようになるう。

命令の名称		漢訳名	発令者
jarliq		聖旨	大カガン／皇帝
üge	(lingji)	令旨	皇太子・太子・大王 諸王・投下
	(iji ~ 'iji)	懿旨	皇太后・皇后・妃子 公主
		鈞旨	駙馬・丞相・大臣 省堂・諸将・総管
		法旨	帝師・国師を含む僧道 の権威者

- (2) より厳密には、杉山 1990 a : 3-4 を参照のこと。発令文の分類に限らず、この杉山論文の「はじめに」「I 蒙漢合璧命令文をめぐる概況」は、モンゴル時代の命令文研究の出発点を示したもので、まず参照すべき序説となっている。
- (3) su(u) の語義に関する諸説の整理は、ひとまず Poppe : 73-76 を参照。仮りに su(u) jali を「威光」と訳すなら単独の su(u) は「威」となろうが、ここでは漢訳の「福蔭」を汲んで su(u) には「威福」、su(u) jali には「威福光」の訳語を便宜上充てておく。
- (4) 冒頭の異同を示せば次の通り。

Rašīd 218, 221, 225, 229, 257では、millat Muḥammadī が al-millat al-Muḥammadiyat に、また Rašīd 287では、Allāh ta'ālā が Xudāy ta'ālā になっている。なおこの far-mān には、本田実信氏による正確で信頼できる全訳がある [本田：238-245]。

(5) Григорьев はこの三行に続けて、

Busayid bayatur qan üge manu

を接続させて [Григорьев：30]、発令者をイル・カン国最後の君主アブー・サイード Abū Sa'īd (d. 1335) とするが、断簡を再構した Cleaves が 'Document III (B)' としているこの一行を、上記三行に繋げるにはそれなりの根拠が示されて然るべきである。なおこのほか、イスラム以外の宗教色が混じた例として、13世紀半ば過ぎの金帳カン、メング・テムルの書簡冒頭が、

By the power of the Supreme God, by the will [of] the Supreme Trinity, The word of Mengutemir. (至高なる神の力により、至高なる三位一体の意志により、メング・テムルのことば) [Schurmann：342; 海老澤1976b：212]

で始まるという。第二句までのロシア語訳文は Kotwicz の引用から確かめられる。"Вышняго Бога силою, Вышня (sic) Троицы Волею" [Kotwicz：136]。原文トルコ語がこの訳の通りとすれば、これはキリスト教が影響を与えている例である。ただし海老澤氏は、「冒頭の一節は、当時トルコ語の原文からロシア語に訳した際に、このようにキリスト教色を帯びたものに改められたのであろう」という [海老澤1976b：212]。

(6) 件の文言をトルコ語で記した最初期のものとして有名なのは、グユクのインノケンティウスⅣ世宛て書簡 (1246年) である。Pelliot 1923：15-16, pl. I 参照。なおドーソン『モンゴル帝国史』、А.П. Григорьев, *Монгольская дипломатика XIII-XV вв.* を見ると、マムルーク朝時代のアラビア語文献—Nuwayrī や Qalqaṣandī など—にも類例が見出せるようであるが、このたびは参着できなかった。

(7) スイモンの報告は、ドミニコ会修道士ヴァンサン・ド・ボーヴェが1247～1259年にかけて編纂した百科全書 *Speculum maius* の一部 *Speculum historiae* に収録されたものが伝わるのみである。J. Richard がその部分を一書にまとめ出版した [Simon 1965]。さて Deus vivus は、ただ「生ける神」の意ではなく海老澤氏も言われる通り [海老澤 1987：90]、immortalis 「不死の」や eternus 「とこしえの」と相通ずる「生き永らえる神、長生なる神」の意味である。なおこの手紙の冒頭も「長生なる神の命令によりて」に続いて「チンギスカンは言う (dicit)」が来るのでこれを「チンギスカン (の) ことば」の方向でも解釈できそうな形である。この前にあるバイジュの教皇宛て書簡には「バイオトノイ (の) ことば (Baiothnoy verbum)」

[Simon 1965 : 114] とみえる。

- (8) Demugin Cingei の Cingei は不明。このままでは ferrum (鉄) が Demugin に相当するなら sonitus (音) が Cingei に対応してしまいそうだが、ここは海老澤氏が紹介する Kappler に従って「チンギスの (名である) デムジンは」と解した方がよいと思われる [Kappler : 222; 海老澤1987: 99]。
- (9) Pelliot の考えを容れた Kappler の仏訳も、「神の子」=モンケとしている [Kappler : 222]。同じく Pelliot の説を紹介する Jackson の英訳中では「神の子」が誰かについては示されていない [Jackson : 248]。
- (10) 手近なものでは表面のカラー写真が『大モンゴル 2』角川書店1992, p. 112に、両面の図はフィリップス著 岡田英弘訳『モンゴル史』学生社 1976, p. 97に見られる。

- (11) 1289年付けのウイグル文字モンゴル語で書かれたアルグンのフィリップ美王宛て書簡の冒頭三句、

- (1) Mongke tngri-yin kũcũndũr
- (2) qayan-u suu-dur
- (3) Aryun üge manu

においてもアルグンとカガンとは同一ではなく、カガンはやはり現皇帝クビライを指す。またトランスクリプションに際し、Mostaert / Cleaves は同列抬頭と見ていようであるが [Mostaert / Cleaves 1962 : 17]、この3行の中でもごくわずかではあるがその抬頭に(1)→(2)→(3)の順がある点は見落とされるべきではない。Mostaert / Cleaves 1962 の写真版を参照。

- (12) 佐口氏、海老澤氏が訳している冒頭の「クリストの御名において、アーメン (In Christi nomine, amen)」は Lupprian の言うように書簡本体には含まれないものである [Lupprian : 245]。

- (13) Pelliot : 161, 166 に、

卓越した神の力によりて、地上の王たるカンから遣わされたエルケルタイのことば
Per potentiam Dei excelsi, missi a rege terre chan verba Elchelthay
とあり、Pelliot はこれに相当するモンゴル文として Mongka t(ä) ngri-yin kũcũn-dũr / qayan-u suu-dur / Äljigidäi ügä manu / を充てている。上のラテン文は、カンの命を受けた上でのことば、という点が明瞭に示されている。なお、この書簡をめぐる諸問題——書簡の真偽も含め——については、海老澤 1976 a を参照。

文献一覧

海老澤哲雄

- 1976 a モンゴル帝国 = 西欧交渉史上の一問題—「エルケルタイ」のルイ九世宛書簡の再検討、『東洋史研究』35(1).
- 1976 b 『元典章』の聖旨に関する一問題、『木村正雄先生退官記念東洋史論集』東京.
- 1979 モンゴル帝国の対外文書をめぐって、『加賀博士退官記念中国文史哲学論集』東京.
- 1987 モンゴル帝国対外文書管見、『東方学』74.

カルピニ／ルブルク

- 1985 『中央アジア・蒙古旅行記』 カルピニ／ルブルク 護雅夫訳、東京.

京大展

- 1990 『平成2年春季企画展「中国石刻拓本展」出品図録』京都大学文学部博物館

佐口 透

- 1970 『モンゴル帝国と西洋』東京.

常風玄

- 1984 「元代法旨碑四種」『中国民族関係史研究』北京、pp. 501-524.

杉山正明

- 1990 a 元代蒙漢合璧命令文の研究 (一)、『内陸アジア言語の研究』5.
- 1990 b 草堂寺閼端太子令旨碑の訳注、『史窓』47.

本田実信

- 1991 『モンゴル時代史研究』東京.

Arat, R.R.

- 1940 *Un Yarlík de Mehmed II, le Conquérant*, Roma. (Fatih Sultan Mehmed'in Yarlığı, *Türkiyat Mecmuası*, cilt VI, 1936-39に初出)

Carpine

- 1989 *Giovanni di Pian di Carpine, Storia dei Mogoli*, (ed.) Manestò, E., (tr.) Lungarotti, M.C., (intr.) Petech, L., Spoleto.

Cleaves, F.W.

- 1953 The Mongolian Documents in the Musée de Téhéran, *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 12.

- Jackson, P.
1990 *The Mission of Friar William of Rubruck*, (tr.) Jackson, P., London.
- Kappler, R.
1985 *Guillaume de Rubrouck, Voyage dans l'empire mongol (1253-1255)*, (tr.) Kappler, R., Paris.
- Kotwicz, W.
1934 Formules initiales des documents mongols aux XIII^e et XIV^e ss., *Rocznik Orientalistyczny*, 10.
- Kurat, A.N.
1940 *Topkapı Sarayı Müzasi Arşivindeki Altın Oran, Kırım ve Türkistan Hanlarına ait Yarıklar ve Bitikler*, Istanbul.
- Ligeti, L.
1972 *Monuments préclassiques 1, XIII^e et XIV^e siècles*, Budapest.
- Lupprian, K.-E.
1981 *Die Beziehungen der Päpste zu islamischen und mongolischen Herrschern im 13. Jahrhundert anhand ihres Briefwechsels*, Città del Vaticano.
- Marco Polo
1928 *Il Milione*, (ed.) Benedetto, L. F., Firenze.
- Mostaert, A. / F.W.Cleaves
1952 Trois documents mongols des Archives Secrètes Vaticanes, *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 15.
1962 *Les lettres de 1289 et 1305 des Ilkhan Arğun et Öljaitü à Philippe le Bel*, Cambridge Mass.
- Pelliot, P.
Les Mongols et la Papauté, *Revue de l'Orient Chrétien*, 3^e série, (1922-1931) pp. 1-222.
- Poppe, N.
1957 *The Mongolian Monuments in ḥP'ags-pa Script*, Wiesbaden.
- Rašīd
1940 *Geschichte Ġāzān-Ḥān's aus dem Ta'rīḥ-i-Mubārak-i-Ġāzānī des Rašīd al-Dīn Fadlallāh* ·····, (ed.) Jahn, K., London.
- Rubruc

- 1929 *Sinica Franciscana* I, (ed.) van den Wyngaert, A.,
Quaracchi-Firenze.
- Schuh, D.
- 1977 *Erlasse und Sendschreiben mongolischer Herrscher für
tibetische Geistliche*, St. Augustin.
- Schurmann, H. F.
- 1956 Mongolian tributary practices of the thirteenth century, *Harvard Journal
of Asiatic Studies*, 19.
- Simon
- 1965 *Simon de Saint-Quentin, Histoire des Tartares*,
(ed.) Richard, J., Paris.
- Tucci, G.
- 1949 *Tibetan Painted Scrolls*, 3 vols., Rome. (rep. Kyoto, 1980)
- Григорьев, А. П.
- 1978 *Монгольская Дипломатика XIII-XV вв.*, Ленинград.
(1993年 9 月 30 日 受理)